路上の人

RAN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
路上の人

【Ｎコード】
Ｎ２３８５Ｔ

【作者名】
ＲＡＮ

【あらすじ】
紛争絶え間ないある砂漠の国。
少女はある日道端で倒れている男性を見つけた。
それはよく見るとロボット。
人々を冷酷に殺す兵器であった。
周りの人々は彼を恐れるが、他のロボットとは違う様子を見せる彼に、少女は惹かれていく。

※サイト、ｄノベ転載

―白い男―　<1>

最初は、人が倒れているかと思った。
でも、よく見ると、首などに不自然な穴があるのが見えた。
こういうのは、戦場でたまに見ることがあった。
人間の形をした機械だ。
私は怖くなったが、家に帰る裏路地に倒れていて、通るのに邪魔だったから、とりあえず声をかけた。

「生きてる？」
「生きてるって、何だ？」
倒れていた男は言葉を発した。
意外にきれいな声と顔で、私は一瞬と惑ってしまった。
だが、その次には、男の問いに、言葉につまった。

「家に、来る？」
その問いに答えることはできず、とりあえずそう言った。

私は身寄りのない孤児だ。
その私がちゃんとした家に住めるはずがない。
私が男を連れてきたのは、仕事仲間数人で住んでいる、言っては何だが、ボロい平屋だ。
とりあえず、青年は立てるようだったので、歩いて来てもらった。
表情はどうにもぼんやりしていて不安だったが。

「あんた、名前は？」
「わからない」
一応男はこちらを見て話したが、目の焦点は合っていなかった。

どこを見ているのかわからなくて、ますます何だか心が落ち着かなくなる。
私と男は、そのまま二人で何も喋らないまま、部屋にいた。

「ただいまー」
「あ、おかえり」
「……」
暗くなると、仲間が次々と帰ってきた。
そして、私の妙な連れを見て、皆訝しげな顔をした。
皆、私を囲むようにして、何も言わずに座る。
私は、どんどん増えるその人数に、いたたまれない気持ちになった。
同年代の者は、「何だそれ！」と一瞬騒いだが、皆が黙っているのを見て、ならって黙った。

「帰ったぞー」
そして、皆が待ちわびていた人が帰ってきた。
この部屋の持ち主で、リーダーでもあるバーキルだ。
「おかえりなさい」
私が声を発すると、バーキルは私を見て、そして隣にいる見慣れぬ人物に視線を向けた。
「イマン、そいつは何だ？」
名前を呼ばれて、私は体が凍りそうになった。怒られる、と思った。
「……道に倒れてて、動いてたから、拾ってきた」
私は恐る恐る言った。
「……拾ってきたって、簡単に言えるものじゃあ、ないよな」
バーキルの声は、優しいが、重い。

「……うん」
私はうなずいた。バーキルの黒い目をちゃんと見ることができなかった。
「……こいつは……ロボット、だよな……？」
バーキルは白い男に近づき、首元や手を見た。
「私は……ロボット、なのか？」
バーキルの言葉に、今まで黙っていた男は口を開いた。
周りにいた者の、息を飲む音が聞こえた。
バーキルも、一瞬驚いたように目を見開いたが、表情を柔らかく崩した。
「何だ。お前は、自分が何かもわからないのか？」
「わからない。先ほどその少女から名前を聞かれたが、覚えていないのだ」
「だが、目の前にあるものが何かっていうことは認識できるみたいだな」
「あぁ。あなたが四十代ぐらいの体格のいい男性だ、ということを推測もできる」
「しかし、自分についてのデータは何もない、と」
「そうだ」
「ふーん……お前、自分が何で動いてるかは知ってるか？」
バーキルは目を細めて、男を見た。
「それもわからない。もしかしたら、倒れていたのは、そのエネルギーが足りなくなったせいかもしれない」
男の身体のあちこちに目線を走らせ、何か考えているようだ。
「まぁ、いいだろう。今のところ無害のようだし。皆が嫌でなければ、ここにいても構わない。どうだ？」
バーキルが周りを見回して言う。
皆黙っていたが、一人が渋い顔をした。
「俺は嫌だ。ロボットにはいい思い出がない。それに、こんな白い

ヤツ気味が悪い。俺は信用できない」
「他には？」
「俺も同感だ」
そして、部屋の半分ぐらいは、それに同意していった。
「だそうだ。俺はここの部屋の持ち主ではあるが、ここにいる皆は大事な仲間だ。彼らの意見を無視するわけにはいかない。お前からの言い分はあるか？」
バーキルが白い男に向かって言った。
気のせいかもしれないが、一瞬男の目が冴えたように見えた。
そして、姿勢を正して、皆をまっすぐに見た。
「私もそう思う。皆さんの言う意見ももっともだ。だが、私自身の勝手な言い分を言えば、ここから出て行ったとしても、私は記憶がないために、どこに行けばいいかわからない。できることなら、ここにいさせてほしい。何でもする。仕事も手伝う。気味が悪いのなら、この家の中には入らない。ただ、仲間に入れてほしい。私に何か、させてほしい」
男の言葉に、皆は黙った。
その言葉は、ロボットとは思えないほど、響いた。

「いや、気持ち悪いと言って悪かった。そこまで言うなら、別にいいぞ。ただ、仕事を手伝ってもらう。家のこととか。ロボットなんだから、色々できるだろう」
最初に反対を口にした男が、気まずそうに言った。
ここにいる者は、皆社会の偏見や差別の視線を受けて生きている者だ。
白い男の言葉を受けて、自分が差別を受けた時を思い出したのかもしれない。
その言葉に続いて、他の反対した者も、渋々、という者もいて、それぞれの反応に差はあるものの、家に住むことを許された。
この家に住むということは、私達の仲間になる、ということだ。

「全員一致なら、文句はない。よかったな。お前の力で説得したことだから、お前はきちんと自分の仕事をこなしていれば、堂々とこの家にいることができる」
バーキルの言葉を受けて、男は表情をほぐした。
「ありがとう」
そういえば、このロボットが表情を動かしたのを初めて見た。
無駄にきれいな顔のために、私は思わず見入ってしまった。
その視線に気づいたのか、男は私の方を見た。
私は慌てて視線をそらした。

「あぁ、ただし、俺達は自分達が生きるので精一杯だ。誰も他の者の面倒をみちゃいられない。だから、お前の面倒もみれない。お前がもしエネルギー切れを起こしても、もしエネルギーの元がわかっても、それを入れてまた動かしてやることはできない。お前が動かなくなったら、もれなくスクラップ行きだ。それで俺達は金がもらえるからな。それだけは言っておく」
バーキルがやや冗談のような明るい口調で言ったが、たぶん本気だ。
「わかった」
男もそれを察したのか、表情を元に戻し、返事をした。

「さて、それじゃあ、お前の名前を決めないとな。ここに住むってことは、俺達の仲間になったんだ。名前がないと非常に面倒だ。ってことで、俺は考えてみた」
バーキルの言葉に、皆が彼に注目した。
「アズハルってのは、どうだ」
「何か意味とか、あるのか？」
一人が聞いた。
バーキルはニヤリとして、聞いた男に対して、人差し指を立てた。
「色白って意味だ」

「まんまじゃん！」
男の子が思わず笑った。
隣にいた姉さんがその子の口を押さえて、気まずそうにバーキルを見た。
「まぁ、そんなもんだろ。無駄に高級そうな名前つけたって、言いづらいだけだし。一応、月のような輝かしい男って意味もあるんだぞ。どうだ。これでいいか？」
バーキルは、白い男に笑顔を向けて言った。
「あぁ、良い名前だ。ありがとう」
白い男、アズハルは、また薄く笑みを浮かべた。
基本的に、あまり表情は動かない。
ただ、愛想程度に表情を動かすようだ。
それも、ロボットらしいと言えば、ロボットらしいかもしれない。

「じゃあ、アズハルが仕事に慣れるまでは、イマン、お前が面倒みろ。ってか、とりあえずアズハルにはお前がつけ」
「うおぉえぇー？！」
「何そんなに驚いてるんだよ。当たり前だろ。お前が連れてきたんだから。アズハルも、その方が気が楽だろう」
「私は助かるが、あなたはいいのか？　えーと、イマン、と呼べばいいか？」
「え、あ、あぁ、そうだよね。うん、私のことはイマン、でいいから。わかった。よ、よろしく、アズハル」
私は、自分でも恥ずかしいぐらい気が動転していた。
最初はあまり気にしないようにしていたが、やはりこのロボット、外見が非常にきれいだ。
あまり見たことがないタイプなので、どうしていいのかわからなくなってしまう。

こうして、ロボット、アズハルと一緒の生活が始まることになった。

＊参考＊

ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｔｕｆｓ．ａｃ．ｊｐ／ｃｏｍｍｏｎ／ｆｓ／ａｓｗ／ａｒａ／２／ｔｏｐ．ｈｔｍ（東京外国語大学アラビア語専攻）

ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ２．ｄｏｋｉｄｏｋｉ．ｎｅ．ｊｐ／ｒａｃｋｅｔ／ｎａｍｅ／ｚｉｔｅｎ．ｃｇｉ？ａｃｔｉｏｎ＝ｂｕｎ｜ｋ＆ａｍｐ；ｂ＝％９２ｊ（ムスリム・ムスリマ名事典））

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2385t/

路上の人

2011年5月13日20時55分発行